

古文…助動詞3

要点

古文のなかで使われる助動詞の「ぬ」には、完了を表すものと打消を表すものがある。この他「なり」「たり」「に」「ね」「れ」なども、意味の識別を要する場合がある。具体例として、平安時代の日記文学『土佐日記』の冒頭文を見てみよう。非常に有名な一節である。

男もすなる日記といふものを女もしてみんとてするなり。

傍線部はどちらも〈サ変動詞+助動詞「なり」〉であるが、一方には終止形「す」が使われているのに、もう一方には連体形「する」が使われている。どうしてこういう違いが現れたかという点、それぞれの「なり」は異なる助動詞だからである。口語訳してみると両者の意味の違いがはっきりする。

男もすると言われている日記というものを、女もしてみようと思っ
てするのである。

前者は伝聞、後者は断定と呼ばれる。接続の違いで意味の違いを見分けなければならない助動詞の代表例である。参考書に頼らなくても識別できるように、これらの接続や語形変化をちゃんと頭に入れておこう。

1 なり (伝聞・推定)

【意味】

① 伝聞 (…:…そうだ…:…といわれている)

【例文】 奥山に猫またといふ物ありて、人を食らふなると人の言ひける
に
『徒然草』

奥山に猫またというものがいて、人を食べるそうだと人が言ったので

② 推定 (…:…らしい…:…ようだ)

【例文】 笛をいとをかしく吹きすまして過ぎぬなり。

笛をたいそうみごとに吹き鳴らして通り過ぎたらしい。

『更級日記』

【活用】

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なり	○	なり	なり	なる	なれ	○

【接続】 活用語の終止形 (ラ変型) の活用語なら連体形

参考

伝聞・推定の助動詞「なり」は耳で聞き知った情報を述べるときに用いられる。それが**他人から聞いた話である場合には伝聞**として訳され、**音や声をもとに話し手自身が考えた想像である場合には推定**として訳される。

これと断定「なり」とを見分けるにあたっては接続方法の違いが決め手となるが、終止形と連体形が同じ形である四段活用動詞の下にある場合は、それが役に立たない。またラ変型活用語の下にあるときも外見上の区別は不可能である。そういうときは文脈から判断しなければならぬのである。なお、「なり」が「言ふ」「鳴く」「音」「声」などの語としよに使われている場合には、伝聞・推定であることが比較的多い。この傾向は覚えておくとういだろう。

2 なり (断定)

【意味】

①断定 (……だ……である)

【例文】 京には見えぬ鳥**なれば**、みな人見知らず。
京では見かけない鳥**である**から、誰も見知っていない。

『伊勢物語』

②存在 (……にある……にいる)

【例文】 天の原ふりさけ見れば春日**なる**三笠みかさの山に出でし月かも

『古今和歌集』

大空を振り仰いで見ると、春日**にある**三笠山に出でいたのと同じ月がのぼってきたことだよ。

【活用】

なり	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なら	なり	なり	なり	なる	なれ	なれ	

【接続】体言・活用語の連体形

参考

断定の助動詞「なり」は形容動詞と同じ活用変化をする。そのため両者は混同されやすい。その識別方法を簡単に紹介しておこう。

副詞「いと(＝とても)」をつけられる↓形容動詞

つけられない↓名詞+断定の助動詞

ところで、連用形「に」には注意が必要である。辞書で調べればわかるが、格助詞や接続助詞にも「に」というのがあるし、完了の助動詞「ぬ」の連用形も「に」なのである。こんなにくさんあるその他の「に」との区別を、きちんと理解しておかなければならないのだ。ここで本来なら接続の違いが識別の決め手になるところだが、残念なことに問題はそう単純ではない。左の例文ではどちらも体言に接続しているが、それぞれの「に」はまったく別物である。

〔例〕これは竜のしわざにこそありけれ。……〔断定の助動詞〕

〔訳〕これは竜のしわざであったのだ。 『竹取物語』

〔例〕火鼠の皮衣、この国になき物なり。……〔格助詞〕

〔訳〕火鼠の皮衣は、この国にはない物である。 『竹取物語』

こういう場合は文脈から判断するしかない。ただし参考までに述べておくと、断定の助動詞の連用形「に」の下には係助詞がついて、さらに「あり」「侍り」「候ふ」「おはす」などが続くことが比較的多い。あるいは、接続助詞をともなった「にて」という形も時折見られる。こうした点を知っておけば役立つこともあるだろう(例外もあるので十分気をつけること)。

3 たり(断定)

意味

断定(……である……だ)

〔例文〕平家の家人**たり**し者もあり。

平家の家来**であ**った者もいる。

『平家物語』

活用

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
たり	たら	たり と	たり	たる	たれ	たれ

接続 体言

参考

連用形「と」は接続助詞をともなった「として」という形で使われることが多い。これは中世以後の和漢混雑文などによく見られる。

完了の助動詞「たり」は連用形接続なので、断定の助動詞「たり」との識別は容易である。

4 ことし

【意味】

①比況 (まるで……のようだ)

【例文】 おごれる人も久しからず。ただ春の夜の夢の**ことし**。

『平家物語』

思いがっている人も長く栄えていることはできない。ただ春の夜の夢の**ようだ**。

②例示 (たとえば……のような……など)

【例文】 楊貴妃**ことし**は、あまりに時めきすぎて悲しきことあり。

『大鏡』

たとえば楊貴妃などは、あまりにも寵愛をうけすぎて悲しいことがある。

③同等・同一 (……のとおりだ……と同じだ)

【例文】 つひに本意の**こと**く会ひにけり。

『伊勢物語』

ついに念願**どおり**結婚したのだった。

【活用】

ことし	基本形	(ことく)	未然形	ことく	連用形	ことし	終止形	ことき	連体形	○	已然形	○	命令形
-----	-----	-------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	---	-----	---	-----

【接 続】 体言・活用語の**連体形**・助詞「の」「が」

5 まほし・たし

【意味】

願望(……たい……てほしい)

【例文】 いかなる人なりけん、尋ね聞かまほし。

どのような人だったのだろうか、尋ね聞きたい。

【例文】 敵に会ふてこそ死にたけれ、悪所に落ちては死にたからず。

敵と戦って死にたいが、難所に落ちて死にたくない。

『平家物語』

【活用】

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
まほし	(まほしく) まほしから	まほしく まほしかり	まほし	まほしき まほしかる	まほしけれ	○
たし	(たく) たから	たく たかり	たし	たき たかる	たけれ	○

【接続】 まほし……活用語の未然形

たし……活用語の連用形

参考

時代が下るにつれて「まほし」よりも「たし」の方が多用されるようになる。なお、形容詞や助動詞「ず」「べし」などと同様に、活用表の左側の列はもっぱら助動詞を下につけるときに使用される。

必修ポイント

●意味

伝聞・推定……なり

断定 ……なり・たり

比況 ……ごとし

願望 ……まほし・たし

●接続

未然形接続 ……まほし

連用形接続 ……たし

終止形接続(ラ変型なら連体形) ……なり(伝聞・推定)

体言・連体形接続 ……なり(断定)

体言接続 ……たり(断定)

※ここからは『Z Study 解答用紙編』の国語「評論7 / 助動詞3 / 疑問」2枚目にご記入ください。

二

【二】 次の(1)～(5)の文の傍線部の助動詞について、(i)ここでの文法的意味として最適なものをあとのア～キの中から選んで記号を記し(同じ記号を何度用いてもよい)、(ii)ここでの活用形をそれぞれ記せ。

(20点)

- (1) ものの覚え初めは、何事ぞや。それにこそまづ聞かまほしけれ。 『大鏡』
- (2) 老いたるは、いとかしこきものに侍り。 『大鏡』
- (3) 虎の子のけはしき山の峰をわたるがごとし。 『大鏡』
- (4) また、聞けば侍従の大納言の御女のなくなり給ひぬなり。 『更級日記』
- (5) 帰りたければ、ひとりつい立ちて行きけり。 『徒然草』

ア 伝聞 イ 推定 ウ 断定 エ 存在 オ 比況
カ 例示 キ 願望

〔二〕 次の文章は『源氏物語』の一節である。これを読み、あとの問に答えよ。

〔頭中将が身分の低い夕顔との間にもうけた娘玉鬘は、母の死後、乳母らとともに乳母の夫の赴任地筑紫に下り、そこで成長した。〕

(玉鬘は)二十ばかりになり給ふままに、生ひととのほりて、いとあたらしくめでたし。この住む所は、*肥前国とぞいひける。そのわたりにもいささかよしある人は、まづこの(姫君の)ありさまを聞き伝へて、なほ絶えず訪れ来るも、いといみじう、耳かしがましきまになむ。大夫監^{たいふけん}とて、*肥後国に族ひろくて、勢ひいかめしき兵^{つはもの}ありけり。この姫君を聞きつけて、いとねむごろに言ひかかるを、(乳母は)いとむくつけく思ひて、「(姫君は)かかることを聞かで、尼になりなむとす」と言はせたりければ、いよいよ危ふがりて、おしてこの国に越え来ぬ。(大夫監は姫君に求婚して、帰り際に)歌⁽¹⁾詠ままほしかりければ、やや久しう思ひめぐらして、

「君にもし心たがはば*松浦^(a)なるかがみの神をかけて誓はむ
この和歌は、(上手に)仕うまつり^(b)たりとなむ思ひ給ふる」と、
うち笑みたるも、*世づかずうひうひしや。

10

注 *肥前国 今の佐賀県・長崎県。

*肥後国 今の熊本県。

*族 一族。

*松浦 佐賀県と長崎県とにまたがる玄海灘^{げんかい}に面する地域。

*かがみの神 鏡神社の祭神。

*世づかずうひうひしや 世慣れておらず初心^{しん}なことよ。

問一 傍線(a)(b)の品詞と終止形、ここでの活用形と意味を、例にならつて説明せよ。(各4点)

例 (め)

助動詞「む」・已然形・意志

問二 傍線(1)について、次の(i)(ii)に答えよ。

(i) 例にならつて文法的に説明せよ。(10点)

例 (知らずとも)

ラ行四段活用助動詞「知る」の未然形+打消の助動詞「ず」の終止形+接続助詞「とも」

(ii) 口語訳せよ(ただし、「ば」は「……ので」と訳すこと)。(5点)

問三 問題文の内容に合致するものを次の中から一つ選び、記号を記せ。(7点)

- ア 乳母は大夫監が洗練された和歌を詠んだことに驚いた。
- イ 玉鬘は二十歳になったら結婚するつもりだった。
- ウ 乳母は玉鬘と大夫監を結婚させたくなかった。
- エ 玉鬘は二十歳になったのを機に出家した。
- オ 大夫監は金に物を言わせて玉鬘を手に入れた。

問題

二

〔二〕 次の(1)～(5)の文の傍線部の助動詞について、(i)ここでの文法的意味として最適なものをあとのア～キの中から選んで記号を記し(同じ記号を何度用いてもよい)、(ii)ここでの活用形をそれぞれ記せ。

(20点)

- (1) ものの覚え初めは、何事ぞや。それにこそまづ聞かまほしけれ。 『大鏡』
- (2) 老いたるは、いとかしこきものに侍り。 『大鏡』
- (3) 虎の子のけはしき山の峰をわたるがごとし。 『大鏡』
- (4) また、聞けば侍従の大納言の御女のなくなり給ひぬなり。 『更級日記』
- (5) 帰りたければ、ひとりつい立ちて行きけり。 『徒然草』

- ア 伝聞 イ 推定 ウ 断定 エ 存在 オ 比況
カ 例示 キ 願望

【二】 次の文章は『源氏物語』の一節である。これを読み、あとの問に答えよ。

〔頭中将が身分の低い夕顔との間にもうけた娘玉鬘は、母の死後、乳母らとともに乳母の夫の赴任地筑紫に下り、そこで成長した。〕

(玉鬘は)二十ばかりになり給ふままに、生ひととのほりて、いとあたらしくめでたし。この住む所は、*肥前国とぞいひける。そのわたりにもいささかよしある人は、まづこの(姫君の)ありさまを聞き伝へて、なほ絶えず訪れ来るも、いといみじう、耳かしがましきまでなむ。大夫監とて、*肥後国に*族ひろくて、勢ひいかめしき兵ありけり。この姫君を聞きつけて、いとねむごろに言ひかかるを、(乳母は)いとむくつけく思ひて、「(姫君は)かかることを聞かで、尼になりなむとす」と言はせたりければ、いよいよ危ふがりて、おしてこの国に越え来ぬ。(大夫監は姫君に求婚して、帰り際に)歌⁽¹⁾詠ままほしかりければ、やや久しう思ひめぐらして、

「君にもし心たがはば*松浦^(a)なる*かがみの神をかけて誓はむ
この和歌は、(上手に)仕うまつり^(b)たりとなむ思ひ給ふる」と、
うち笑みたるも、*世づかずうひうひしや。

注 *肥前国||今の佐賀県・長崎県。

*肥後国||今の熊本県。

*族||一族。

*松浦||佐賀県と長崎県とにまたがる玄海灘に面する地域。

*かがみの神||鏡神社の祭神。

*世づかずうひうひしや||世慣れておらず初心なことよ。

10

問一 傍線(a)(b)の品詞と終止形、ここでの活用形と意味を、例にならって説明せよ。(各4点)

例 (め)

助動詞「む」・已然形・意志

問二 傍線(1)について、次の(i)(ii)に答えよ。

(i) 例にならって文法的に説明せよ。

(10点)

例 (知らずとも)

ラ行四段活用動詞「知る」の未然形+打消の助動詞「ず」の終止形+接続助詞「とも」

(ii) 口語訳せよ(ただし、「ば」は「……ので」と訳すこと)。(5点)

問三 問題文の内容に合致するものを次の中から一つ選び、記号を記せ。(7点)

ア 乳母は大夫監が洗練された和歌を詠んだことに驚いた。

イ 玉鬘は二十歳になったら結婚するつもりだった。

ウ 乳母は玉鬘と大夫監を結婚させたくなかった。

エ 玉鬘は二十歳になったのを機に出家した。

オ 大夫監は金に物を言わせて玉鬘を手に入れた。

二

解答

(1)	(i)	キ	(ii)	已然形
(2)	(i)	ウ	(ii)	連用形
(3)	(i)	オ	(ii)	終止形
(4)	(i)	ア	(ii)	終止形
(5)	(i)	キ	(ii)	已然形

解説

- (1) 「まほし」はキ「願望」の助動詞。傍線部は係助詞「こそ」の結びなので、已然形である。
- (2) 「に」という形になる語は複数あるが、この「に」は助動詞であると設問に示されているから、可能性としては、

完了の助動詞「ぬ」の連用形 ……連用形に接続する
 断定の助動詞「なり」の連用形 ……体言・連体形に接続する

のどちらかということになる。傍線部は形式名詞「もの」に接続しているの、ウ「断定」の助動詞「なり」の連用形である。「かしこきものなり」と、「に」を終止形「なり」にしても文意は通じることからも確認できる。

- (3) 傍線部は〈まるで……のようだ〉と訳せるので、オ「比況」の助動詞である。「ことし」という形になるのは終止形のみ。
- (4) 助動詞「なり」には、次の二種類がある。

伝聞・推定の助動詞「なり」 ……終止形（ラ変型は連体形）に接続する
 断定の助動詞「なり」 ……体言・連体形に接続する

- 傍線部の直前の「ぬ」は、八行四段活用の尊敬の補助動詞「給ふ」の連用形「給ひ」に接続していることから、完了の助動詞「ぬ」の終止形。したがって、この「なり」は伝聞・推定の助動詞であるとわかる。伝聞・推定のどちらであるかについては文脈から判断する。前に「聞けば」とあり、人から聞いた話を語っていることは明らかなので、ア「伝聞」の助動詞。文末にあるので終止形である。
- (5) 「帰りたければ」は〈帰りたいたので〉という意で、「たけれ」はキ「願望」の助動詞「たし」の已然形。

口語訳

- (1) (あなたが) 覚えている最初の出来事は、どういことか。それをまず聞きたい。
- (2) 年をとった人というのは、たいへん尊いものなのです。
- (3) 虎の子が険しい山の峰を越えるようなものだ。
- (4) また、聞くところによると侍従の大納言の娘さんが亡くなられたということだ。
- (5) 帰りたいので、ひとりできっと立って行った。

【二】

解答

問一 (a) 助動詞「なり」・連体形・存在

(b) 助動詞「たり」・終止形・完了

問二 (i) マ行四段活用動詞「詠む」の未然形＋願望の助動詞「まほし」の連用形＋過去の助動詞「けり」の已然形＋接続助詞「ば」

(ii) 詠みたかったので

問三 ウ

解説

問一 (a) 「松浦」は注にあるように地名である。「かがみの神」は鏡神社の祭神。この「なる」は助動詞「なり」の連体形で、ここでは存在の意を表し、「松浦にいたるかがみの神」という意味になる。

(b) 「たり」には次のようなものがある。

完了・存続の助動詞「たり」……連用形に接続する

断定の助動詞「たり」……体言に接続する

タリ活用形容動詞の活用語尾……状態・性質を表す漢語に接続する

直前の「仕うまつり」はラ行四段活用動詞「仕うまつる」の連用形なので、この「たり」は完了・存続の助動詞だと判断できる。「詠む」という、その状態が継続しない動詞についているので、ここでの意味は「完了」である。

問二 傍線部は「詠ま（マ行四段活用動詞「詠む」の未然形）／まほし

かり（願望の助動詞「まほし」の連用形）／けれ（過去の助動詞「けり」の已然形）／ば（接続助詞）」と品詞分解される。「まほし」は「……たい・……てほしい」の意。「ば」は、「けり」の已然形「けれ」に接続して順接の確定条件を表し、ここでは「……から・……ので」という原因・理由を表す。口語訳は「詠みたかったので」「まほしかり」とカリ活用になっているのは、下に助動詞「けり」があるからである。

問三 アは、「洗練された和歌」「驚いた」の部分で、「この和歌は、（上手に）仕うまつりたりとなむ思ひ給ふる」と、うち笑みたるも、世づかずうひうひしや（『この和歌は、（上手に）お詠みしたと思います』と、ほほえんでいるのも、世慣れておらず初心なことよ）」とあるのとそぐわない。イオは問題文に書かれていない内容である。エ乳母の発言に「姫君は……尼になりなむとす（『尼になってしまおうとしている』）とはあるが、これは大夫監の玉鬘への求婚を断るための口実であると考えられ、玉鬘が実際に出家したとは書かれていないので誤り。正解はウ。「大夫監が」とねむごろに言ひかかるを、（乳母は）いとむくつけく思ひて（『大夫監が』たいそう熱心に言い寄ってくるのを、（乳母は）とても気持ち悪く思っている）」の部分から、玉鬘と大夫監を結婚させたくないという乳母の気持ちがうかがわれる。

口語訳

（玉鬘は）二十歳ほどにおなりになるにつれて、成長して（容姿が）整って、（田舎暮らしをさせておくのが惜しいほど）大変すばらしく立派である。この住む所は、肥前国というのであった。そのあたりでも少しでも由緒ある人は、まずこの玉鬘の姫君のようすを伝え聞いて、やはり絶

えず(使いの者が)訪問(しては手紙を贈ったり取り次ぎを頼んだり)しに来るのも、たいそうな騒ぎで、うるさいほどである。大夫監といつて、肥後国に一族が多くて、勢力が強大な武士がいた。この姫君のことを聞きつけて、たいそう熱心に言い寄ってくるのを、(乳母は)とても気持ち悪く思つて、「(姫君は) こういうこと〔Ⅱ求婚〕には耳を貸さず、尼になつてしまおうとしているのです」と(人を介して)言わせたところ、(大夫監は)いよいよ不安になつて、無理にこの国に境を越えてやつて来た。(大夫監は、姫君に求婚して、帰り際に)歌を詠みたかったので、しばらくの間思案をめぐらして、

「君にもし……(あなたに対して、もし私が心変わりをしたならば(どんな罰でも受けます)と、松浦にいたかがみの神にかけて誓いましよう)

この和歌は、(上手に)お詠みしたと思います」と、(満足そうに)ほほえんでいるのも、世慣れておらず初心なことよ。

✓ 語句チェック

あたらし……①もったいない・惜しい・残念だ。②(そのままに)

ておくのが惜しいほど)すばらしい。

めでたし……すばらしい。立派だ。

よしあり……一応の由緒がある。一応の教養がある。

耳かしがまし……うるさい。やかましい。

ねむごろなり……心底から熱心にする。

むくつけし……気持ちが悪い・気味が悪い・いとわしい。

うひうひし……経験が乏しい。物慣れない。初心者らしい。

全問の品詞活用問題は「答えを記入」して後付けしています。添削方法は「添削ガイド」で確認ください。

答案感想欄

文法の説明に苦勞しました…

添削者からのオススメ復習用教材
2 週目の要点学習 (古文助動詞 3)
知識事項の再確認をしておきましょう。

添削者より

辞書・参考書等を使って解きましたか(はい、いいえ)
難しくかった問題 (問二(1))

品詞分解は慣れないと大変ですよね。ただ、これからどんな難度が上がっていく文章を正確に読みこなすには、正確な品詞分解が不可欠です。最初は時間がかかりますが、文法書も活用しながら、せじじっくりと取り組んでみてください。確実な力がついでいきますよ。

添削者名
三島

三

体言・活用語の連体形に接続している「なり」は「断定・存在」を意味する助動詞。
ここでは「松浦にいる鏡の神」という意味なので「存在」と判断する。

6/8 問二

(a) 助動詞「なり」連体形・存在

(b) 助動詞「たり」終止形・断定

断定の助動詞「たり」は体言につく。
活用語の連用形に接続している「たり」は「完了・存続」を意味する助動詞。
ここでは「上手にお詠みした」という意味なので「完了」と判断する。

7/10 問二

(i) マ行四段活用「詠む」の未然形 + 願望の助動詞「まほし」の連体形 + 過去の助動詞「けり」の已然形 + 接続助詞「ば」

☆「詠ま／まほしかり／けれ／ば」という品詞分解を確実に行う。
「まほし」は願望の助動詞で、未然形に接続する。「けり」は過去の助動詞で、連用形に接続する。「ば」は接続助詞で、未然形に接続するときは順接仮定条件、已然形に接続するときは順接確定条件を表す。

8/5 問二

(ii) 詠んでほしかったので

傍線部のあとで大夫監自身が思案の末に歌を詠み、うまく詠めたと悦に入っている。この「まほし」は他者への希望ではなく自分自身の願望ととらえるのが適切。

9/7 問二

ウ

乳母は大夫監を「いとむくつけく思」っており、縁談には乗らない態度を示している。ウが内容に合致している。

「まほしかり」の形になるのは連用形のみ。

2

1

1